

第1章 学級経営よもやま話

第2節 学級目標

どの教室でも、多くは黒板の上の壁の辺りに、学級目標が掲げられています。学級開きから間を開けずに張り出されているクラスもあれば、じっくり子どもを観察して4月中をメドにというクラスもあります。家庭訪問を終え、学級経営案を踏まえて大型連休明けにというのもあります。学校・学級規模や勤務校での年数が違いますので、掲げる時期はいろいろあっていいのです。問題は、中身です。

この節は、

■キャッチコピーと具体的課題■

■過程の共有化■

の2つの項から成っています。

■キャッチコピーと具体的課題■

この10年あまり、学級目標は「キャッチコピー」と「具体的課題」の2段階構成にしています。

キャッチコピーは、集団づくりの抽象的イメージです。イメージの世界というのは感覚の世界で、ビジュアル化すれば子どもに届きやすい世界です。

私の集団づくりの理念は、自立した個人と協働です。詳しくは、「第6節 集団づくりA to Z」で述べます。ここでは、そのイメージが「集合花」であるタンポポだとだけ申しておきます。

私に「集合花」という言葉を教えてくれたのは、教師になって5年目に会った教え子でした。中西規代美さんの5年生の時の日記です。

今まで、「教師は子どもに育てられる」と思ったことがいくつもありますが、これも忘れ得ぬひとつです。

1982年6月16日

……“たんぽぽ”の花のことについて思うことがあります。“たんぽぽ”の花みたいに生きたいんです。この花は無数の小さな花の集合花です。1枚の花びらとと思っているのは、完全な1個の花です。他にも“たんぽぽ”のような花があります。「みんながいっしょになっている」そんなものが大好きです。

(赤ペン) 「かたち」がいっしょになっているんじゃなくて、「こころ」がいっしょになっている集合体(学級集団)でありたいですね。

1983年3月26日

菜の花が畑にさいていますね。なんとなく集合花は力強くかんじます。1つの小さな花が集まって、1つの大きな花をさかせているのですね。タンポポやアジサイなんかもそうです。とてもいろいろなことを、生きていく中で花は教えてくれます。たとえ世の中のかたすみにさいている花だって……。菜の花は、私たちに人生をすごす間、どんなことにも負けずいっしょに生きてきた仲間といっしょになって何事もやれば、最後にすばらしい花をさかせられるということを教えながら生きているのです。

キャッチコピーを具体的にいくつか紹介します。

《具体例1》4年生でまとまりを欠いていたクラスを5年生で担任した時のもの



■ ■ 小学校5年・学年つうしん

2003. 4. 7 (月)

蒲公英

No.1



たんぽぽの花のように生きよう!!

タンポポのようなクラスを作ろう!!

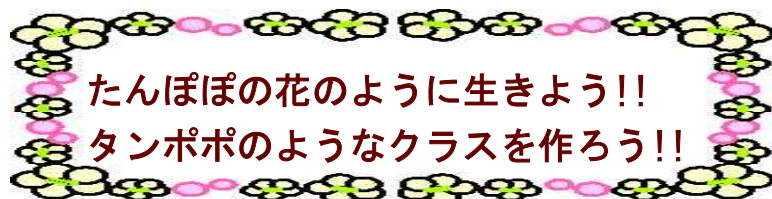
きょうから5年生。

みなさんのなかまに入れてもらうことになりました。よろしくお願いします。

高学年のスタートです。たくさんの楽しみが待ち受けています。同時に、今までにない責任の重さも待ち受けています。

学校がみなさんにとって楽しいところになればいいなあと思います。勉強っておもしろいなって感じてもらえたらいいなあと思います。そして、25人の一人ひとりが、自分らしさを精一杯^{せいいつぱいはっき}発揮できたらいいいなあと思います。—そんなクラスをみんなの力でつくりましょう。

ところで、学年つうしん「蒲公英」(この^{むずか}難しい漢字は「たんぽぽ」と読みます)のようですが、このタイトルは、みなさんへの二つの思いを込めて付けました。



みなさんには、これが何のことだか分かるでしょうか。あれこれと^{そうぞう}想像をめぐらせてください。そして、学校の周りにたんぽぽの花が咲いたら、先生の思いをお話しします。



■小学校5年・学年つうしん

蒲公英

2003. 4. 22 (火)

No.5



たんぽぽの花の秘密に迫る!!



ヨウを例に確かめてみよう。

まずは3年生理科の復習。植物は、「葉」「くき」「根」という3つの部分でできている。そして、「葉」の変形したものとして「花」がある。「花」は、「花びら」「めしべ」「おしべ」「がく」で構成されている。レンギ



さて、タンポポの花はどうだろうか。

「花びら」「めしべ」「おしべ」「がく」はどこにあるのだろうか。花びらがいっぱいあってよく見えない。そこで、花を

半分に割ってみた(右の写真)。そうすると、次頁の写真のようなものがぎっしりと並んでいる。観察してみよう。





1枚の「花びら」だと思っていたものは、実は1個の花だったのだ。



つまり、タンポポにはそれぞれに一人

前の花がいっぱいあって、それらを形作っているのだ。それぞれがった姿が美しい。そんなタンポポたかった。



が集まって一つの「花」独立していながら、集まの花を、みんなに紹介し

たんぽぽの花のように生きよう!!

きみたちは 25 人の 5 年生の中の一人ではない。世界にたった一人のきみなのだ。上の写真の 5 つの花を見てごらん。みんな表情が違うだろ。かけがえのない自分を生きてほしい、かけがえのない自分をみがいてほしい、かけがえのない自分を輝かせてほしいと思う。「たんぽぽの花のように生きる」とは、オンリーワンの自分を生きるということだ。

タンポポのようなクラスを作ろう!!

かけがえのない一人が 25 人集まって、■■■小学校の 5 年生がある。上の写真の 5 つの花はそれぞれに表情が違うのに、まとまりとしてのタンポポは美しい。一人ひとりが独立した個人であり、個性的であってほしいと同時に、クラスという集団として輝いてほしい。それぞれのよさを生かしながら、一人ひとりを輝かせてくれるクラスを作りたい。それが、「タンポポのようなクラスを作る」ということだ。

ーそんな思いを込めて、始業式の日「蒲公英」第 1 号をきみたちに手渡した。課題は大きく高い。一緒に頂上をめざそう。

《具体例 2》「連凧」

「集団」と「個」の関係は、1 つの花である「たんぽぽ」にあたるのが 1 つの「凧」、集合花としての「タンポポ」にあたるのが「連凧」です。

保護者を巻き込んだトラブルが続き、女子の関係が困難を極めて 5 年生を終えました。そのクラスを 6 年で担任した時のものです。

■ ■ 小学校6年・学年つうしん

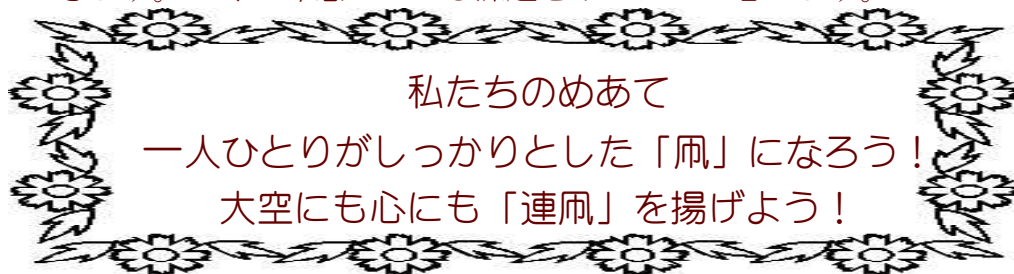
きらきら

2005. 5. 9 (月)

MORE No. 26

私たちの課題が見えてきた

6年生最初の1か月が過ぎました。ふわふわとした羽毛にくるまれたような、優しい時間が経過していきました。教室に流れる空気(ムードと言ってもいい)はとて素晴らしいと思います。しかし、ムードだけではやがて物足りなさを感じる日がやってきます。ぼくが今感じている課題を示したいと思います。



私たちのめあては2つです。それぞれのめあてについて、具体的に述べていきましょう。

■一人ひとりがしっかりと「凧」になるということ

自分の五感で見聞き、自分の頭で考え、自分で判断したことを、自分の言葉と行動で表現する—そうした生き方をすることが、自分を大切にすることになるのです。ぼくが「自分」という言葉にこだわるのは、一人ひとりが人生の主人公になってほしいと願うからです。人の意見に耳を傾けることと、判断や行動を人任せにすることは全く違います。

同じものを見聞きしても、感じ方や考え方はさまざまです。したがって、言葉や行動で表現されることも人によって違います。すべての人の顔が違うのと同様に、考え方や表現も違っていいのです。この違いを「個性」と言います。

一人ひとりがしっかりと「凧」になるということは、個性(自分らしさ)を大切にすることです。静かすぎる授業はだめです。ワイワイガヤガヤが一杯の教室にしましょう。いろんな考えや答えがあるから学習が深まるのです。仕事をするときには、指示される前に動きましょう。新しいアイデアは、自分から働きかけることによって生まれるのです。

■大空と心に「連凧」を揚げるということ

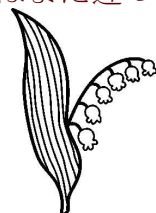
「凧」を1本の糸でつなぐと「連凧」になります。しかし、それでは「連凧」の魅力を説明したことにはなりません。「連凧」は、1枚1枚の「凧」をつないで作ります。それぞれの「凧」は揚がるように作られているのですが、ちょっとかたむくものや、すぐに落ちてくるものもあります。その点では人間の「個性」

と似ています。それら1枚1枚の「凧」を25枚つないだ「連凧」は、最もよく揚がっていた1枚の「凧」よりもなお勢いよく揚がるのです。人間に置き換えて言えば、25人の「個性」が集まることによって30人分も50人分のパワーになるのです。これが「連凧」の魅力です。

きみたちの1つ先輩は、運動会の応援団や音楽発表会、映画作り、きみたちとのバスケットボール大会などで、すてきな「連凧」ぶりを見せてくれました。きみたちはどんな「連凧」を揚げるのでしょうか。大空に勢いよく舞う「連凧」をぼくは毎日思い描いています。そのためにも、まずは自分という「凧」をみがいてほしいと思います。

人が凧と違うのは、大空だけではなく心にも「連凧」を揚げられるところにあります。心に揚がる「連凧」は、目で見ることはできません。それは、大空にいくつ目かの「連凧」が揚がったとき、ポッと姿を見せてくれるのです。それがいくつ目かは分かりません。いつごろかも分かりません。見ないままに卒業を迎えることだってあるでしょう。

心に揚がる「連凧」のことを「なかま」と言います。「仲良し」とはまた違って、言葉で言うのは難しいのですが、ぬくもりがあってほっとできるような時間と空間が広がっています。ぼくは、きみたちと一緒にこの時間と空間を見たいと思います。



おうちの方へ

定期の家庭訪問が終わりました。ご協力ありがとうございました。子どもたちは、多くの人々の思いや生活を小さなランドセルに詰め込んで登校しているんだと改めて感じました。私やクラスに温かいまなざしを注いでいただいていることをとてもうれしく思います。

この1か月の生活や家庭訪問を踏まえて、1年間の学級目標を立てました。「凧」と「連凧」は、「個」と「集団」の課題をシンボル化したものです。「個」については、全体的に線の細さを感じています。「しっかりとした『凧』」をめざす中で、人間の根っこの部分を太くたくましいものに鍛えたいと思います。6年生のスタートを歓迎してくれた子どもたちを、「このクラスでよかった」と言って卒業させてやるのが、私の仕事だと自らに課しています。そんななかま集団を育てることが、「心に『連凧』を揚げる」ということだと考えています。

どうか知恵と技と体力を貸してください。

《具体例3》「北斗七星」…6人の子どもが2等星で担任が3等星です。



ぼくらは今日から「ほくと」チームだ！

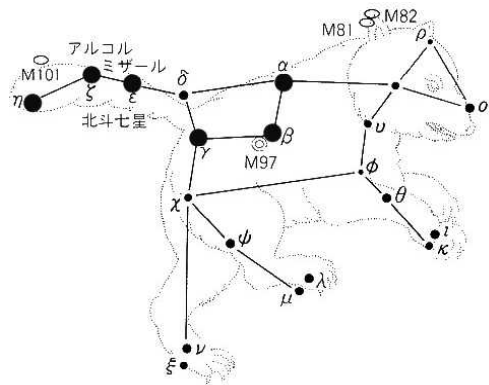
学年つうしん「ほくと」のことをお話しましょう。

「ほくと」を漢字で書くと「北斗」です。これだけではなんのことかわかりませんね。正しい名前は「ほくとしちせい北斗七星」といいます。

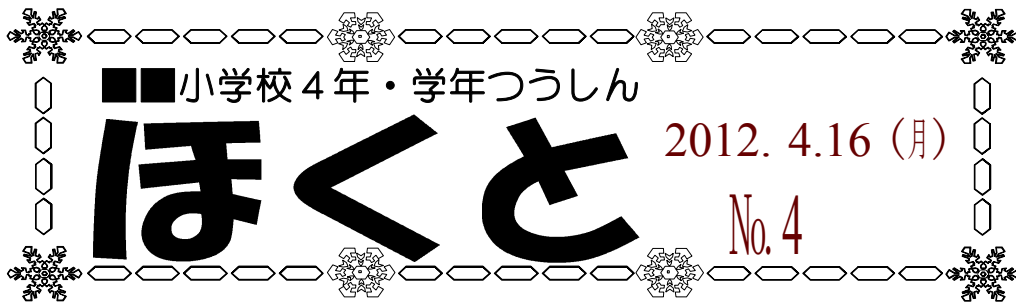
夜空を見上げるとたくさんの星があります。いっぱいあることを「星の数ほどある」と言うくらいですので、いくつあるのかわかりません。明るい星は見えませんが、暗い星は望遠鏡でも見えません。星は明るい方から1等星、2等星、3等星…と言ひ、1等星は全部で21個、2等星は67個あります(季節や場所、時間によって見える数はちがってきます)。星のことは理科の時間に勉強します。

さて、いよいよ北斗七星の話です。北斗七星とは、「北の空に見える斗(ひしゃく)の形にならんだ七つの星」のことです。北斗七星はおおぐま座という星の集まり(星座)の一部で、7つのうち6つが2等星です。

6つの星+1つの星で星座を作っている北斗七星って、このクラスといっしょだと思いませんか？ぼくはね、みなさんに1番じゃなくていいからしっかりかがやく「星」になってほしいと思います。そして、6つの「星」が力を合わせて、ぼくもちょっと手助けをして、きれいな「星座」になったらすてきだなと思います。そんなことを考えながら、学年つうしんに「ほくと」という名前をつけました。



さあ、チーム「ほくと」、いざ出発！！



学級目標が決まりました

キラリかがやいて！！
We are チームほくと！

クラスの合言葉を考えてもらったら、「みんな」とか「ほくと」という言葉を使ったらいいいという意見がありました。きっと学年通信のタイトルのことを思い浮かべたのですね。そこで、「キラリかがやいて！！We are チームほくと！」という目標にしました。

☆ キラリかがやいて！！

北斗七星を形作っている星の1つ1つは、キラリかがやいていなければなりません。一人ひとりがかがやくためには、一生けんめい努力することが大切です。

1学期は、3つのことをがんばりましょう。

- ① 大きな声ではっきり話そう
- ② わすれものをなくそう
- ③ 分からない時は、「分かりません」と言える子になろう

☆ We are チームほくと！

「We(ウイ) are(アー) チームほくと！」というのは、「私たちはチームほくとです」という意味です。7つの星が集まって北斗七星を作っていることは、前に書きましたね。私たち7人は、学級という「星座」を作っているチームです。

いいチームはなかがよくて、力を合わせることができます。力を合わせると、一人ではできないようなすごいこともできるようになります。私たちは、そんなチームをめざします。

具体的課題は、キャッチコピーのめざす集団イメージを具体化した下位目標です。

学級目標に限らず、生活目標にも共通して言えることです。

「あいさつをしよう」という目標を掲げたとします。これを年間目標として掲げる場合もあります。さらに下位目標を設定して、1学期「大きな声であいさつしよう」2学期「自分からあいさつしよう」などと示す場合もあります。学年の高低や達成の難易度などを勘案して決めます。

「忘れ物をしない」「教室では騒がない」といったものは、目標としてはNGだと考えています。そもそも「～ない」という否定的文言は目標たり得るのでしょうか。「学習の準備を整えよう」「教室では静かに過ごそう」と「Let's ～」の表現に変えるだけで、肯定的目標になります。

キャッチコピーと具体的課題の関係を、これも具体的に紹介します。

■小学校5年・学年つうしん

しろやま

2010. 4.19 (月)
No. 4

学級目標が決まりました！

■キャッチコピー■

一人ひとりが花 集まればタンポポ

■キーワード■

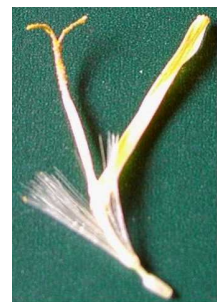
【花】一所懸命 ねばり強さ 【タンポポ】思いやり 協力

先日、“クラスの合言葉”を書いてもらいました。「大切な笑顔」「やさしく楽しくはきはき」「協力し合えるクラス」「友だちを大切にするクラス」「いつも元気なクラス」「仲よくできるクラス」など、一人ひとりの思いのこもった言葉が集まりました。そんな中で、吉村さんは「ひまわり タンポポ にじ」と書いていました。吉村さんが心の中で描いているイメージと、他の人たちの言葉は重なり合っていると思います。そこで、合言葉には「タンポポ」を使わせてもらいます。

■一人ひとりが花■

タンポポは、花びらと思われている1つ1つが花です。黄色い“花びら”をよく見ると、1つ1つにちゃんとめしべとおしべがあります。

「一人ひとりが花」というのは、それぞれが一人の人間としてしっかりと生きようということです。そのためのキーワードが、「一所懸命」と「ねばり強さ」です。



《一所懸命》

よく使う「一生懸命」ではなく、「一所懸命」を使っているのにはわけがあります。鎌倉時代のお話です。家来の武士は將軍から土地を与えられ、家来は將軍のために命がけで戦いました。「將軍からもらった一ヶ所の領地を命を懸けて守ること」が「一所懸命」の語源です。「一生懸命」は、「一所懸命」から生まれた言葉です。「一生」はずうっと、「一所」はその場・その時といったちがいがあ

ます。つまり、その日、その場所でしなければならないことを懸命にしよう。頑張ったら少し休もう。そしてまたやらなきゃならない時が来たら、また気合いを入れてやろうということです。

《ねばり強さ》

めんどろなことや難しいことに出合った時、決してあきらめずに何とかしてやり通す子になりましょう。それが自信につながるし、周りからの信頼につながります。

■集まればタンポポ■

タンポポは、集合花です。“花びら”の1つ1つが独立した花ですが、それをタンポポとは誰も言いません。“花びら”が1つに集まって“タンポポ”になるのです。



「集まればタンポポ」というのは、それぞれにちがった一人ひとり(それを個性と言います)が、1つになることで素晴らしいクラスを作ろうということです。そのためのキーワードが、「思いやり」と「協力」です。「思いやり」と「協力」は、クラスがきれいなタンポポの形になるためのボンドです。



《思いやり》

友だちが困っていたら、「どうしたの?」「大丈夫?」と声をかけましょう。思いやりの心は、言葉や行動によって相手に届くのです。

《協力》

友だちと力を合わせて学習や仕事に取り組みましょう。知恵と力を出し合うことで、1+1が2ではなくて、3にも4にもなるのです。

■過程の共有化■

学級目標は、教室の装飾品ではありません。重要なのは、目標に向けての歩みを担任と子どもたちが共有することです。歩み=過程の共有化には評価が欠かせません。評価はポイントを押さえて的確に褒めることですが、これが難しい。

「蒲公英」のクラスの2年間を紹介します。



■ ■ 小学校5年・学年つうしん

蒲公英

2003. 7. 18 (金)

No. 29

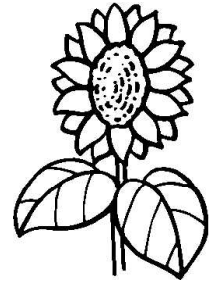


5年生の1学期は○?, △?, ×?

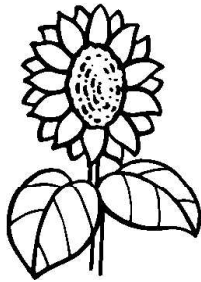
今日は1学期の終業式。一人ひとりの学習や生活の様子は、「あゆみ」を見てほしい。ここでは、「クラス」としてどうだったかを考えてみたい。

いたずらと保健室へ行く人の多さでトップだったころと比べると、今のきみたちは別人のように落ち着いている。ほんの少し大人に近づいたということもあるだろうが、きみたちは成長した。しかし、これも外から見れば、へこんでいたのが平らになったに過ぎないのかも知れない。

私たちの目標は、「教室」という入れ物に静かに入っていることではない。それは「クラス」を作っていくためのスタートではない。私たちは、やっとそのスタートラインに立とうとしている。——と、先生は見ている。



私たちがめざしているのは、「**タンポポのようなクラス**」を作ることだ。それは一言で言うと、それぞれのよさを生かしながら、一人ひとりを輝かせてくれるクラスを作るとのことだ。一人ひとりが輝いて見える場面には、いくつも出合わせてもらった。しかし、タンポポの花の輝きにはなっていない。



きみたちと出会った4月、忘れられないことがある。それは、「お楽しみ会をしたらもめるだけだから、お楽しみ係は作らない。」
「花を飾ったら花びんが割れるだけだから、花をかざらない。」
と、きみたちが言い切ったことだ。事実、だれ一人として花を持ってきた人はいなかったし、教室をきれいに飾った人もいなかった。お楽しみ会もなかった。みんなのために何かをするという姿は、あまり見られなかった。

やっとスタートラインに立とうとしていると思えるようになったことは、うれしい。でも、先生は今のクラスの姿に満足していないし、むしろ残念に思っている。何とかしようという声がどこからも出てこないことも、また残念に思っている。

2学期は、係の名前も中身も、学級会のやり方も、朝の会や帰りの会も、全部変える。仲良しの友だちのためにだけではなく、みんなのために一生けんめいになることが、すてきだと思えるクラスにしたい。9月からがんばろうな。

以下に、折々の評価コメントを掲載します。実際には子どもの日記などがあって、その後にコメントしているのですが、ここでは省略します。



■ ■ 小学校5年・学年つうしん

蒲公英

2003.12. 19 (金)

No. 61

2学期が終わる。4月はじめに、「タンポポのようなクラスを作ろう」と言った先生の言葉を覚えているだろうか。一人ひとりが精一杯自分を発揮し、クラスが輝いている。季節は冬を迎えたけれど、私たちのクラスに今やっと1輪のタンポポが花開こうとしている。先生は、そのことがうれしい。



■ ■ 小学校5年・学年つうしん

蒲公英

2003.12. 22 (月)

No. 63

続・冬空にタンポポの花一輪

1学期末の「蒲公英」No. 29 で、先生は「タンポポの花の輝きにはなっていない」ことが残念だと書いた。初めてお楽しみ会をした後の「蒲公英」No. 43 では、「今までのきみたちに一番足りなかった力を、ほんのちょっとつかめたような気がします」と書いた。お米についての長い討論の末に実現した手巻き寿司パーティー後の「蒲公英」No. 61 では、「私たちのクラスに今やっと1輪のタンポポが花開こうとしている」と書いた。そして今、きみたちに次の言葉を贈りたい。「冬空の下に私たちのタンポポが1輪、今、花開いた。」

覚えておいてほしい。みんなの心が一つに重なった時、あの美しいハーモニーが生まれたということ。そして、やり終えた後の満たされた気持ちと、拍手の心地よさを。タンポポは1輪で咲くより野原一面に咲く方がもっといい。私たちのめざす「タンポポのようなクラス」は野原なのだ。群れ咲くタンポポの美しさは、日食の時紹介したダイヤモンドリングの輝きと同じだ。新しい年を迎えると同時に6年生からリーダーを引き継ぐきみたちに、先生は心から期待している。



■小学校6年・学年つうしん

蒲公英Ⅱ

2004. 12. 20(月)

No. 169



音楽発表で「タンポポ」の大輪開く！

私たちは、一人ひとりが「たんぽぽ」になること、そしてクラスが一つの「タンポポ」になることを目標にしてきました。16日は、そんな私たちの「記念日」になりました。去年の今ごろ、『蒲公英』No. 63 に学年発表のことを書いています。ぜひ、読み返してください。この1年間の歩みを振り返りながら、これからの3ヶ月を見つめましょう。



■小学校6年・学年つうしん

蒲公英Ⅱ

2005. 3. 23(水)

No. 211



出会いに乾杯!!~「蒲公英の子ら」へ~

24名のなかまのみなさん、卒業おめでとう。卒業証書を手にもち立ち行くきみたちに、はなむけの言葉を贈りたいと思います。

個としての「たんぽぽ」と集団としての「タンポポ」をめざして、私たちは2年間ともに歩んできました。決して立派な完成品ができあがったわけではありません。しかし、きみたちはよく努力したし、まちがいなくきみたちは変わったと思います。

そもそも、個としての「たんぽぽ」にゴールなどありません。個性とは、生ある限り磨き続けていくものです。それでも、今たしかに言えることは、一人ひとりが「タンポポ」を構成する一つの花であるという自覚を持って生きるようになったこと、一つの「たんぽぽ」としてよりよく生きようと努力するようになったことです。音楽発表会を控えた12月12日、橋本さんは日記にこう書きました。「みんなやる気を出して、全員で歌いたい。今までは歌詞がまちがっていで、それで大きな声で歌えなかったけど、今はちがう。大きな声で歌える。私は、そうになっている。みんなも大きな声で歌ってほしい。」ぼくはこんな日記が出てくるのをずっと待っていたし、この日記を見た時、発表会の成功を確信しました。

集団としての「タンポポ」は、今日で一応の終わりを迎えます。消えるわけで

はありませんが、これ以上にどうにかする努力はもうできません。そういう意味では、今日がゴールということになります。とびきりではないけれど、十分にきれいな「タンポポ」に育ったと思います。思い返せば、「お楽しみ会をしたらもめるだけだから、お楽しみ係は作らない。」「花を飾ったら花びんが割れるだけだから、花を飾らない。」という現実から私たちの2年間が始まりました。5年生1学期末の『蒲公英』No. 29には、「先生は今のクラスの姿に満足していないし、むしろ残念に思っている」と書いています。12月16日の手巻き寿司パーティー後の『蒲公英』No. 61に、「季節は冬を迎えたけれど、私たちのクラスに今やっと1輪のタンポポが花開こうとしている。」とあり、直後のつげの子集会を伝える『蒲公英』No. 62,63のタイトルは「冬空にタンポポの花一輪」となっています。そして5年生最後の『蒲公英』には、「きみたちに求めたいのは、ゲームで『一つになる』ことではない。そのことを第一歩として、学習やなかまのことを考え合うことで、『一つになる』ことだ。」と「宿題」が記されています。そして、この1年の歩みがあるわけです。きみたちはすてきな「タンポポ」として、今「栄光の架橋」(注:この年のヒット曲。卒業式に歌った。)の上にあります。

学年つうしん『蒲公英』は、なかまをつなぐ「ボンド」でありたいと願いつつ号を重ね、今最終号を書いています。「魔法のボンド」ほど効き目はなくても、『蒲公英』を配った時に一瞬静かになる空気がぼくは大好きでした。今後、『蒲公英』というタイトルの通信は二度と発行しません。そして、きみたちのこの2年間の歩みを心に刻んで、「蒲公英の子ら」と呼びたいと思います。

出合いに乾杯！これからもきみたちのとなりを歩く一人でありたいと思います。健闘を心から祈っています。



通信のその部分だけを並べると何だかくどい感じがしますが、リアルタイムでは期間も空いているし、内容も記憶から遠のいていきます。節目節目に成長のあとを振り返り、目標に照らして評価することで、教師と子どもが成果と課題を共有できるのだと考えます。

蛇足になりますが…。私は高学年担任が多いのですが、学年が下がれば当然もっと易しい文章を書いています。4年生の通信「ほとく」最終号です。

■小学校4年・学年つうしん
ほくと 2013. 3. 15 (金)
No. 43

キラリかがやいたか？ ほくとはチームになったか？

4年生が終わろうとしています。1年間をふりかえりたいと思います。

キラリかがやいたか？

私たちのクラスのキャッチコピーの前半は「キラリかがやいて！」でした。一人ひとりがキラリとかがやけたでしょうか。

きみたちの一番の良さは、すなおであること。これは、人からの教を自分の身につけていく時に、とても大事なことです。えんぴつの持ち方、わり算の筆算の仕方、漢字練習の仕方などなど、言われたことをきちんとやろうと努力する姿がいっぱい見られました。

この1年で変わったと思うのは、強くなったこととかくさなくなったことです。

先生に注意でもされたら泣き出しそうだった人が、このごろ多少の「口撃」ではめげなくなったものね。それって、前向きのエネルギーが強くなってることだから、素晴らしいことです。

自分のまがいやできないことをかくさなくなったのは、すごいことです。周りの友だちが信じられて自分に自信を持てるようになると、できない部分も人に見せられるようになるのです。そして、かくさなくなることで、できるようになる自分が始まるのです。

勉強を「覚える系」と「考える系」に分けると、きみたちは「覚える系」が得意です。特に、「いろいろ売り」を覚えてしまったのには感心しました。まあ、忘れるのもはやいという人もいるのですが…。きみたちの一番の苦手は、「考える系」つまり、考えて自分の言葉で話したり書いたりすることです。ここをみかければ、きみたちはもっとかがやきます。高学年の宿題です。



ほくとはチームになったか？

キャッチコピーの後半は「We are チームほくと！」でした。このクラスは、「私たちはチームほくとです」と自信をもって言えるようになったでしょうか。

「ウーン、びみょうだなあ」というのが、ぼくの感想です。

クラスのふんいきはけっこういいし、算数やパソコンを教え合っている姿なんかもほほえましいです。でも、何か物足りません。

先日の学活の時間のことです。6人で運動場へ出たものの、何をするかで意見がまとまらず、結局20分以上の時間を過ごし、「おもしろくなかった」と言って教室に帰ってきました。ぼくは2階のベランダから「よしよし」と思っ

ました。

なぜ、バラバラが「よしよし」かって？バラバラになるのは、一人ひとりが自分の意見を持っているということです。例えば、力の強いだれかの意見にみんながついていくクラスだったら、そんなバラバラは起こりません。まとまって遊んでいるように見えるけど、本心はイヤイヤかもしれません。自分の意見を持って、口に出して言えたというのは、いいことなのです。

でもこのままでは遊びは始まりません。実は、北斗七星だってバラバラです。地球とのきよりはみんなちがっていて、きれいな形にならないでなんかいません。だれかがそれを線でつないでくれたから、きれいなひしゃくに見えているのです。きみたちにもまとめてくれる人、リーダーが必要なのです。低学年の間は先生がその役割をしてくれました。それを今度は自分たちでするのです。順番やルールを決めたり、ゆずりあったりしながら、遊びを始めさせるのです。ほくとが「チーム」とよべるのは、その時です。これもまた、高学年になるきみたちの宿題です。